おちほ

第78号 平成26年3月31日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 太田正則
TEL 0748－77－2299 FAX 0748－77－5588 http://ochiho.noor.jp/

春来たり!! スプリングコンサート

3月2日に、スプリングコンサートを行いました。今年は『ヒューマンノート』という関西を中心に活動されているシンガーソングライター寺尾仁志さんがディレクションするグループをお招きしての、とても本格的なコンサートとなりました。

前半ではとても力強く、聴いているだけで元気が出てくるような生のウタ声を間近で体験し、利用者さんも大興奮。皆さん、思い思いに体を揺らしたり、一緒になって歌われたりと楽しまれていました。

後半はワークショップ形式で、ヒューマンノートさんのメンバーとカバンと楽器制作を行いました。初めてお会いする人達のため、中には少し緊張されている利用者さんもおられましたが、メンバーと自由に制作活動に取り組まれていました。最後は作った楽器を使い全員でウタを歌いました。2時間の短い時間でしたが、「ウタ」を通じて一緒の時間を過ごすというとても貴重な体験になったのではと思っています。

光について

山下陽一

「光」とはなにか

糸賀一雄の思想と行動をもっとも簡潔に凝縮し象徴していることばは「この子らを世の光に」だと思います。糸賀の著作「この子らを世の光に」（一九六五年　柏樹社）の「あとがき」に「世の光というのは聖書の言葉であるが、この言葉のなかに、「精神薄弱といわれる人たちを世の光たらしめることが学園の仕事である。精神薄弱な人たち自身の真実な生き方が世の光となるのであって、それを助ける私たち自身や世の人々が、かえって人間の生命の真実に目ざめ救われていくのだ」という願いと思いをこめている。」と述べています。

また、「光」について「精神薄弱な人びとが放つ光は、まだ世を照らしてはいない。世の中にきらめいている目もくらむような文明の光輝の前に、この人びとの放つ光は、あれどもなきがごとく、押しつぶされている。その光は異質の光なのである。文明の輝きになれた目には、その異質の光は、光としてうつらないかもしれない。」（糸賀一雄著作集Ⅱ一四三頁）と述べられており、この光は今日の五色七色の強烈で刺激的な光が溢れている世界では、存在感は薄れ感じることが難しく、繊細な感性の持ち主のみに感知される特別な波長の光のことかもしれません。

また糸賀は比叡山における体験から、「一千年余りの昔、伝教大師があの山を開き、一隅を照らす人こそ国宝だと喝破されたことを偲んだ。私たちもここで、ほんの小さな一隅を照らそうと思うのであった。」（前掲「あとがき」）と述べています。この一隅の光は明るさの事ではなく着実な足がかりとなる「場の認識」の意味にも理解されます。このようなところから糸賀の述べる光のもつ意味は多義性があると思います。「光」とは一体なにか？これは糸賀のキリスト教の信仰の深さが背景になっていることであり、それを著述のなかの文章の断片により憶測する方法しかないのですが、生誕一〇〇年を機会に糸賀の信仰に根ざした「光」について迫ってみたいと思います。

キリスト教福音書における「光」

聖書には星の光がイエス生誕の地へ学者たちを導く（マタイ第2章9節）という、一点により方角を示し人びとを導く光がありますが、多くの場合は光が周囲に満ち溢れているとか光に包まれるというイメージをもっています。糸賀が「この子らを世の光に」ということばの源としたのはヨハネの福音書「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」（ヨハネ―八・一二）という成句だと思います。この光によって自分たち自身や世の中の人びとが、かえって人間の生命の真実に目覚め救われていく、としています。同じヨハネですが、「言（ことば）の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」（同―一・四）とされ、また「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」（同―一・九）としています。この光はプリズムを通すと光の帯に分光する無機質な光ではなく、生命力を内に抱く光の束のようなものとか、あるいは束となっている光に命を封じ込めそれが無限の時空を超え満ち溢れ後世に隙間なく拡散され繋いでゆくともいえるでしょうか。

キリスト教の信仰を得て青年時代から教会の活動に参加していた糸賀が「光」に込めた深い意味を吟味する必要を思います。

たいまつを引継ぐ

生命誌的にみると「命」が地球に発生して以来四〇億年といわれています。しかも時間軸において生命が一瞬も途切れたことがない。その証拠として今私たちが生きているという事実に驚愕するのですが、まさに無限の「いのち」の継続がありました。この「いのち」の継続は消えたものもありますから「もの」によって引継がれるといったものではなく「生存し続けたい」という「いのちがもつ意思」の働きかけにより可能だったといえるでしょう。

糸賀は「愛の育ち」や「共感の世界」について触れていますが、「愛の育ち」の本質において先に挙げた「いのち」「ことば」「ひかり」の三つの側面を捉えることができるのではないかと考えています。

「いのち」の継続性は「無限の時間性（無時間性）」を、「ことば」は相互の関係において「今まで生きてきたことの根底をゆさぶる出会いと対話」にとって不可欠なこと、そして「ひかり」はそのドラマが展開される「ステージとしての場所性」に欠かすことができないもの、これら三要素は互いに融合し一体不可分となって産まれたものが糸賀の述べる「愛」の姿であり、「共に育つ」ことへと発展することが可能になる、といえるのではないでしょうか。

敗戦直後の殺伐とした世相にあって不安と虚脱が暗闇として蔓延していた時、糸賀のかざすたいまつのともし火はどれだけ多くの人たちに希望を与えたことでしょう。

糸賀は「日本の国に本当の輝きがまいりますように、世界から本当に平和と喜びが満ちますように、自覚者が責任をもちます」と、まず祈りそして誓いました。糸賀からたいまつを引き継いだ私たちは今その自覚と意志が問われ重い宿題が課せられているように思います。

（二〇一四・二・一七）

みたされるということ

施設長　太田正則

今冬は寒くなるとの事で公用車のタイヤ交換など早い段階から雪に備えていました。しかし、十二月、一月と殆ど降らなかったので安心していたところ二月に入って大雪に。当日、利用者さんの通院で信楽に向かって出発したものの、トラックが道路を塞いで立ち往生し、結局目的地に着けないということで引き返す始末でした。一方、関東ではこれまでにない大雪に見舞われ、多くの方が被災されました。この自然災害で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、甚大な被害に遭われた方々に心からお見舞い申し上げます。

さて、今年三月、糸賀一雄生誕百年を迎えるにあたり、昨年十二月に氏の遺稿を元に「福祉の道行」という本が出版されました。その中に記述されている箇所と同じようなことを、私は利用者さんとの関わりの中で実感することがありました。

それは、

『発達は二歳が三歳となり、三歳が四歳となるという方向で普段の積み上げがなされるばかりではない。二歳は二歳として、三歳は三歳として、その各々の段階の中に実現しなければならない無限の可能性を持つのであるから、この可能性を豊かに実らせることが発達の中身である。豊かな人生、生きがいのある人生は、あらゆる現在をそれ自体として充実させることにある。そのことがあふれて次の段階に発達していくような生活であらしめたい』（―生命の輝く子どもたち―福祉の道行　糸賀一雄著　中川書店）

この「あふれる」という箇所は前号に触れた「満たされない感情が常にどこかに張り付いていて、剥がしたくても剥がせない、いっぱいにしたくてもあふれるところまで行かない」ということとは意味が違うのかもしれませんが、人が満たされることによってその次元から卒業し、それが次の発達段階、つまり成長につながることになる、ということではないかと思います。そう考えると人の成長（発達）は幾つになってもあるのだということを教えられました。

そのことを関わりの中で実感させてくれたのがKさんでした。その彼が今年一月に急逝されました。享年三十九歳という若さでした。私たちは自分が見たこと、聞いたこと、教わったこと、そしてなによりも体験したことをもとに価値観を養い、磨き、それを基本に置いて利用者さんに必要な支援を考え提供しています。また、対人援助において最も大切な『気づき』は、どれだけ多くの物の見方ができるかということで決まってくると思うのですが、この価値観を磨くことと物の見方を増やすことで人は形成されていくのではないでしょうか。現在の私という人格は、彼との関わりが大きく影響しています。そして、発達とは何か、それを保証するということはどういうことなのかを考えるきっかけをもらいました。前号にも書きましたが、彼らと共に過ごすことがなければこれほど多くのことを考えさせられることはなかったと思います。生きる意味、生かされている意味、幸せとは、良い事とは、悪い事とは、目の前で起こる利用者さんのすべての言動に意味があり、その度に考えさせられ、今の私が形成されています。私は彼らのおかげで少しずつですが成長させてもらっていると思うのですが、彼らの発達を少しでも促せたかは疑問です。

『豊かな人生、生きがいのある人生』を提供できるように、これからも多くの職員ともっともっと意見を交わして価値観を磨き、共有し、その人にとって良い支援とは何かを考えていきたいと思います。

平成25年度 クリスマス会 午前の部

12月22日に落穂寮の3大行事の一つである【クリスマス会】が前回広報『おちほ』でお伝えしました、多目的学習室で行われました。

午前の部では、外部からジャズバンドの『めぐみとあめ』を迎え、日頃接する事が少ないジャズを生演奏で楽しむ機会に恵まれました。

『めぐみとあめ』のメンバーの方々の素敵な演奏と軽快なトークに、利用者さんも楽器を使って、体をリズムにあわせて動かしたりと、それぞれの方法で楽しんでおられ、その姿を見た職員も、とても楽しむことができたと同時に、新たな利用者さんへの理解が深まりました。

『めぐみとあめ』の演奏の後は、職員による歌やダンスで利用者さんに楽しんでいただきました。

それぞれ職員が利用者さんのために練習していた弾き語りやダンスに、利用者さんにも参加して頂き、利用者・職員が一緒に楽しむことができました。

年内最後の行事は、午後の部に続きます。

ディナー

午後の部

夕食からは豪華なディナー。

前菜のシーザーサラダから始まり、スープ、パンと続き、メインはチキンのソテー。クリスマスならではといったメニューで皆さんすぐに召し上がられ、配膳が追いつかないといった感じでした。

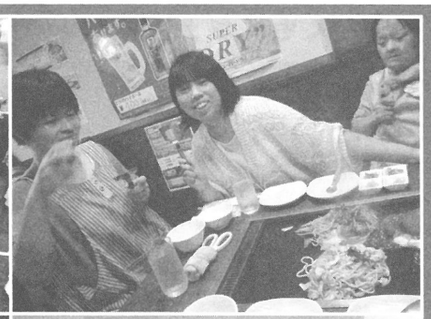
また、食堂内もステンドグラスや、キラキラの装飾で飾り付けられ、普段とは違う食事風景に皆さん酔いしれていたのではないでしょうか。

食事が終わった後は室内の電気を消しキャンドルサービス、続けて、各テーブルにケーキが配られました。ケーキを見るとどの方も待ちきれないといった表情で配り終えるのを待っておられました。

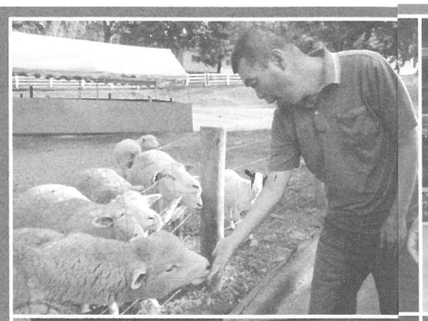
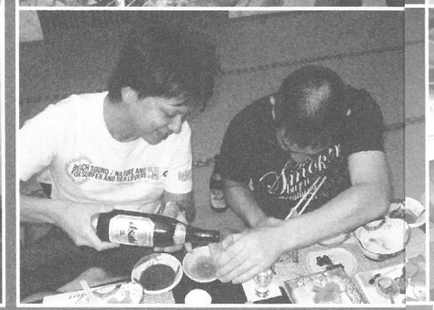
ケーキを食べた後は、皆さん待ちに待ったプレゼント渡し。各担任がそれぞれ考え、選んできたプレゼントをサンタに扮した職員が渡していきます。名前を呼ばれると照れ笑いをしつつも嬉しそうに受け取る姿がとても印象的でした。今年も皆さんに喜んでもらえ、沢山の笑顔を見ることができました。来年もまたすばらしいクリスマス会を迎えられたらなと思います。

リフレッシュ旅行2013

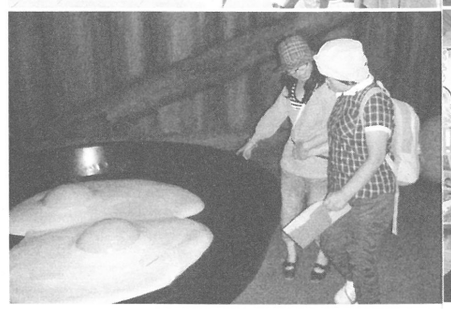
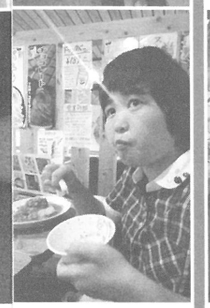
リフレッシュ旅行2013

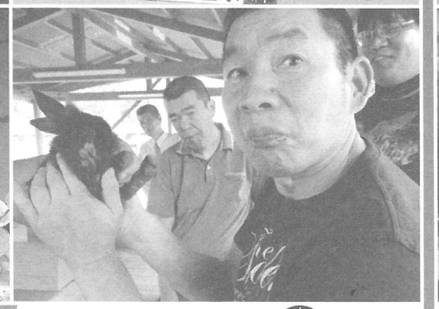


お母さんと一緒 in 大阪

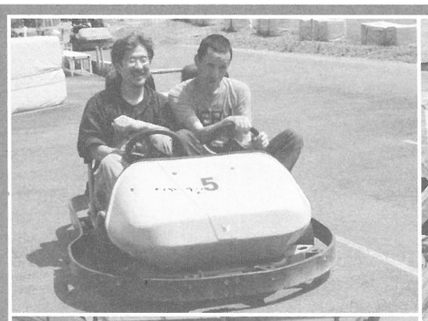



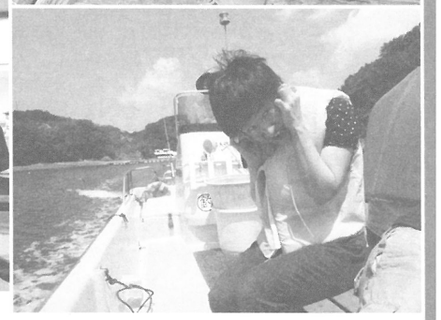
京都太秦映画村 日帰り



草津温泉in 群馬

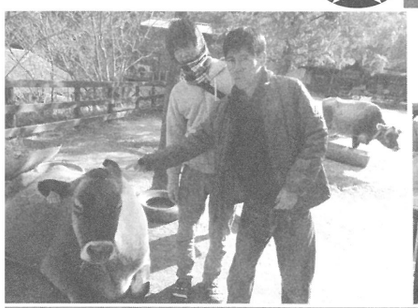


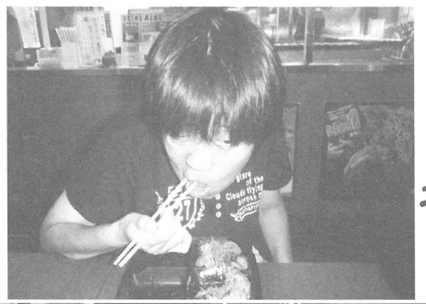


海、体験、遊びin 三重

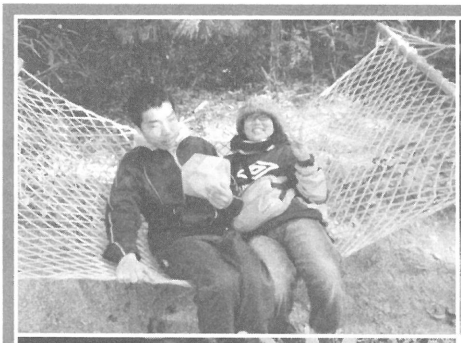
Diseny on ICE in 香川

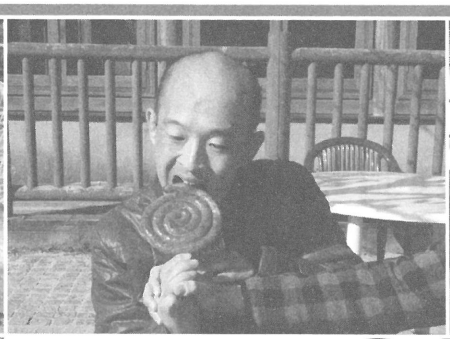
もくもくファーム① 日帰り





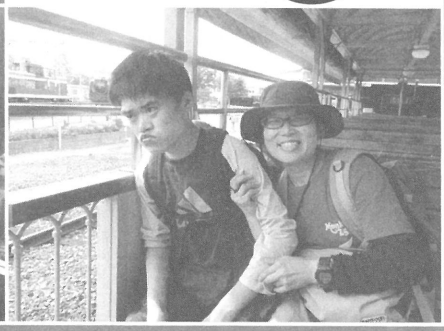
工場見学 in 兵庫



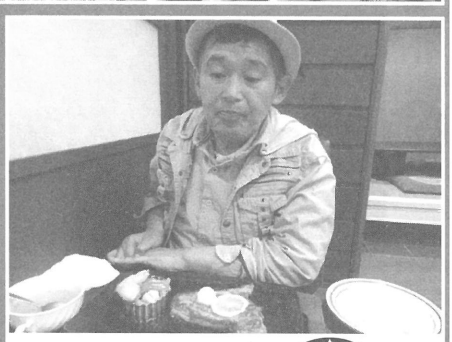


もくもくファーム② 日帰り

梅小路公園 日帰り

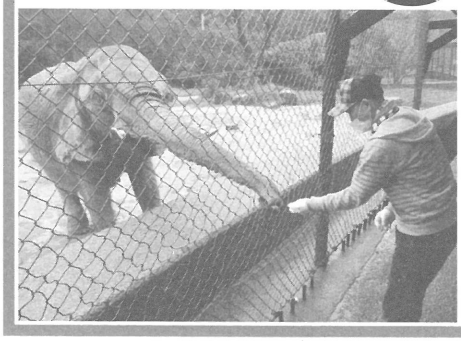


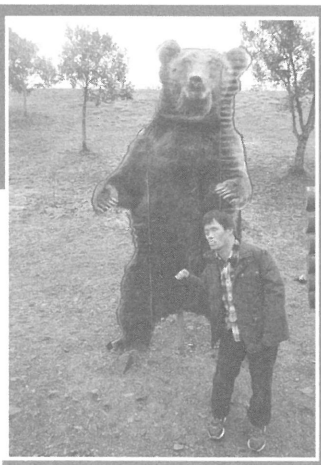
ライオンバス(温泉)in 愛知



松阪牛グルメ 日帰り

姫路セントラルパーク 日帰り





あんパンマンミュージアムin 兵庫

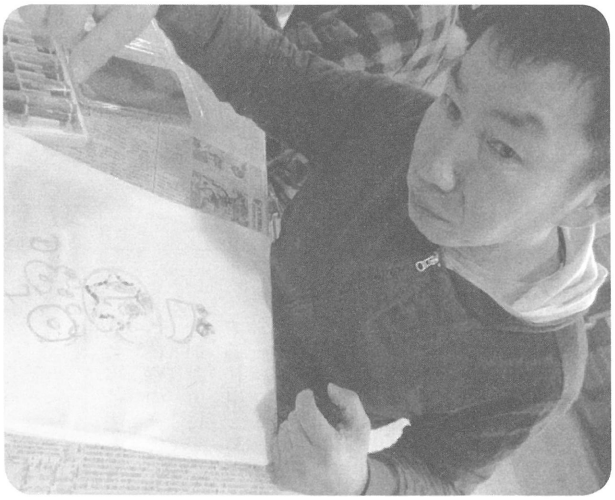
リつしッシュ旅行つづき←

<表紙から続いて…>大好きな歌を通じての交流。とっても楽しいひとときでした♡

プリンダコンサート No.2

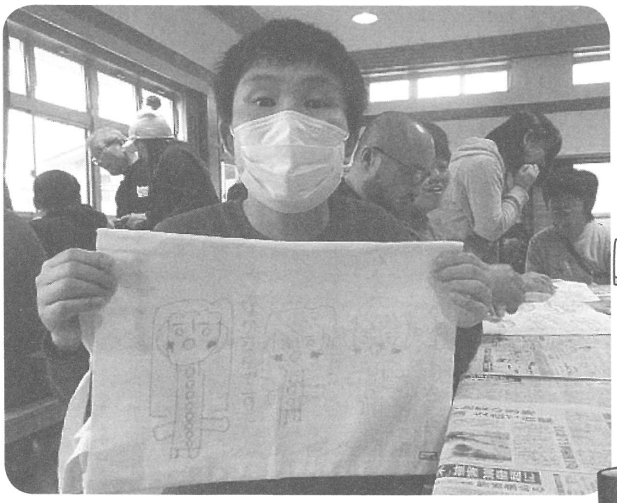
↑どんな楽器ができるかな？

↑一粒、一粒入れていきます。
↓歌の力ってすごいです。すぐに打ちとけました



↑カバン制作
↓このカバンがアフリカの子どもたちのもとへ

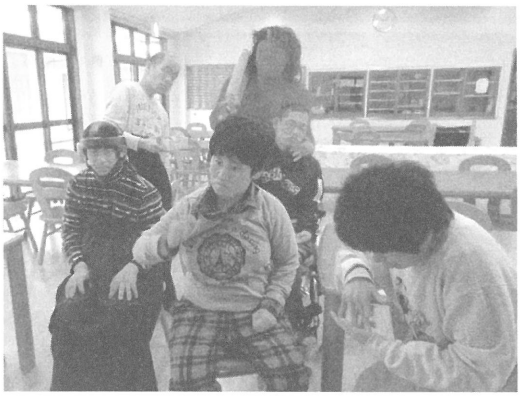
どの方に託そうかな
↓作ったカバンをお気に入りの方に渡しました。



福は内!! 落穂の節分

今年も節分の季節がやってまいりました。落穂寮でも、食事のメニューにちらし寿司が登場（残念ながら恵方巻ではありませんが）節分の季節がきたなぁ、と実感します。

さて、今年も年男、年女を引き連れて、鬼が男子棟と女子棟を練り歩きます。今年も本物の豆を撒くのはもったいないので（50人が豆を撒くのですから相当な量になってしまいます。）新聞紙を小さく丸めたものを用意。これなら、ぶつけられる鬼役の職員も安心です。皆さん、投げるときは容赦ないので。



年男、年女のみなさん

今年の鬼はちょっとリアルです…

さて、豆まきが始まると、皆さん元気良く「鬼はーそと！福はーうち！」と職員と豆をなげ、鬼も「こりゃたまらん」と退散です。

そんなこんなで、今年一年の幸せと健康を祈願しました。今年も良い一年になりますように。

ご協力ありがとうございます。

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申しあげます。

今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

平成26年3月現在

寄付金
㈱信基金属

物品の寄贈
平岩美晴
滋賀県生命保険協会
坂本充男
北村康雄
滋賀教区浄土宗青年会
宇川新蔵

（敬称略）

泉

平成25年度が終わりました。今年度、落穂寮では、これまでの体育館と管理棟の解体、新たな多目的学習棟の完成がありました。落穂寮が、石山の地から移転してきた当時からある最後の建物が消えてしまったことは、時代の移り変わりを象徴しているのかもしれません。この時代の流れの中で、福祉に関する法律や制度も、目まぐるしく変化し続けています。しかし、その根底に流れる思想は、時代を超えた揺るぎないものであるはずです。それを再確認させてくれたのが、今年度行われた糸賀一雄生誕百周年記念事業でした。落穂寮も微力ながらこの記念事業に協力させていただきました。誰もが同社会の中で「共に生きる」こと、自分らしく生きることで「世の光」となれること。糸賀先生の思いを学ぶことは、時代を超えても変わらない福祉観があることを再確認させてくれました。この変わらない福祉観に見合うような、利用者さんを第一に考えた支援を提供していくことができるよう、日々心がけていきたいと思います。

木言（こと）

森の木々たちも競争している
ゆっくりとした時間の中で
太陽を求めて上に上に
木々の競争で
森の中には薄暗い
そこはコケやキノコの世界
森を形作るのは
木だけではない